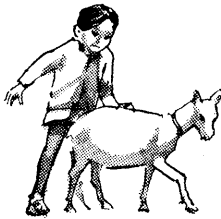


幼児の音楽について

司 会 本 田 和 子
出席者 堀 合 文 子
関 勢 治 り 子
加 守 満 真
津 依 田 寿 美



本田 コタージュシステムに興味を持っていらっしゃる加勢先生と、保育の実践の場にいらっしゃる幼稚園の先生方とごいっしょに、自由に話し合ってみたいと思うのですが、はじめに実践的な立場で毎日お子さまと生活をしていらっしゃる先生方から、保育の中で現在子ども音楽がどうなっているのか、お話を聞いていただけたらと思います。

関先生は三歳児のクラスをお持ちでいらっしゃいますし、幼稚園の生活がスタートしているところで、いかがですか。

関 専門的なことを専門的に身につけさせるのが目的ではありませんが、音楽というのは非常に大事なことで、年齢的にも大いに身につけさせたい時期だと思えます。音楽教育というと、先生の能力だけで一方的に方向づけることが多かったのではないかと思うのですが、子ど

もが自分から欲し、自分から選んでいっ

て、生活の中で身につけてほしいと考え

ています。今まではかくピアノを中心

にしていたことが多かったと思うのです

が、今度はレコードとか、遊んでいてい

っしょにうたをうたったりとかして、音

楽を生活の中で身につけてほしいと考え

られて、おとなの分野であるからなんと
ななくかさればよいと考えていました
が、現代の社会に生活している子どもた
ちには、きれいな美しい本当にいい音楽
を耳から入れるということが大切だと思
うのですが、音楽教育の面からももちろ
んそうですが、よい音楽をきくことが性
格にもひびくものを持っていると考えて

堀合 音楽といっても幼稚園での幼児

の音楽は、音を出すのと身体を使うのが

いっしょなので、おとなが考える音楽と

は違い、実際していることはたいへん幅

が広いのです。身体を使うことが音楽の

基礎になり、リズムの基礎になり、両方

に共通のものとなるのではないでしょう

か。それでいてやはりうたもうたうし、

きくことも、楽器もするのです。

生活の中でしていくことは当然で、そ

の中でも今まではきくということ(鑑賞)

が幼稚園ではある程度むずかしいものと

いかなければならないし、またこの意味
で大いに現代の幼児のためにとりいれて
いったらよいのではないかと思えます。
本田 今二人の先生からうかがった毎
日の問題をきっかけに、いろいろのこと
を話し合ってみたいと思います。

加勢 一貫した音楽という観点でみ

て、お二人の先生のおっしゃった、子ど

ものあそびや生活の内容が具体的にはっ

きりととらえられて、専門的な音楽家と

しての音楽に対する感覚や考え方といっ

しょになった時、最もよい答が出ると思

うのです。

コダーイシステムの場合には、今おっ

しゃったようなことを考えた上で教材の

検討、教材にみあった方法がなされてい

るのです。今、きくということをいわれ

ましたが、子どもにとって生理とか心理

とか年齢にみあったもので、ききやすい

ものは何かを音楽の中で考える。それを

おさえてもっと広い保育領域の中で結び

つけて考えていくという視点が大事だと

思うのです。現場で扱われている教材が

現代の子どもたちとびったりあっている

かを認識しなおす必要があります。

日本の場合、音楽教育は学校音楽から

始まっていて、それ以前の幼稚園とか保

育園とかの音楽教育はないのです。専門

的に考えた時、四〜六歳の年齢はとても

大切で後で手直しができないのです。で

すから幼児へのアプローチが、生活の中

で子どもが喜びながら音楽するというも

能力があれば、音楽を教えることはでき

曲でできる能力です。

のです。技術は教えられなくとも音楽
する心を教えることができ、子どもはそ
れにより意欲がでてくるのです。だか
ら、幼稚園や保育園の音楽教育の主要目
的は子どもが音楽を好きになるというこ
とで、技術の鍛練とかは問題外だと思っ
たのです。

幼児の場合、楽器や先生の絶対音感に
たよるより、子どもに合わせる方が落ち
こぼれる子どもがへります。子どもにと
って余裕があつて楽しめるので、結局は
音楽が好きになるということです。世界
的に子どもの中の伝承的なものは、子
どもの生活の中から生まれたわらべうた

があつてそれにみあつた音楽があれば、
両方きれいに入つてくると思ふのです。
その時音楽とお話を分けないでいっしょ
にやるのが一つの方法です。先生が子ど
もから即興的にひろう能力を前提として
導入していくことができればよいと思っ
たのです。子どもをみていて、ある部分の
子どもの所でひろい、それが季節であつ
てもなんであつてもどこか一部を、用意
していた教材に入れることができれば理
想的だと思ふのです。先生の方はいろい
ろな教材を用意しておかなければいけな
いわけでは

掘合 音楽の心を持つには、ある程度
音楽を知り、専門的なことを知っていな
いといけないでしょうか。指導する者が
心だけ持っていてはだめじゃないでしょ
うか。

で、だいたい二音構成です。日本の場合
それが一音構成でもあるのです。平板的
な音でリズムで変化が出てきます。
日本のことばというのが特殊であつて
日本の子どもの音楽教育という場合、私
たちが考えている教材が、はたして日本

即興とかそういうものが、客観的に立
派でなくてもいいと思ふのです。二音と
か三音とか、八小節とか四小節とか限定
されたものだけを先生が知っていればよ
いのです。それを教えこむのではなく、
それを発火点としてきちんとおさえたと
持ちの教材を与える前提とするのです。

加勢 ある程度の技術のレベルはある
と思ふのです。技術の種類が今まではビ
アノでしたが、どちらかというとた
す。日常語で子どもがうまく使つたりあ
そんだりしていることをひろえる能
力、旋律にうつつしかえたり、音域を子ど
もにあわせてかえてあげる、作詞作

語で生活している子どもにあうかどうか
考える必要があるのです。日本の音楽教
育という洋楽です。わらべうたという
言葉に密着した音楽教育がありますが、
先がなくなつてしまふのです。
現代っ子にアッピールするようなお話

持ちの教材を与える前提とするのです。

関 幼稚園の生活の方から考えます。子どもの年齢の小さいほどリズムが先行するような気がするのです。今おっしゃったように、うたを身体全体であらわし、そこに音楽的なものをつけていくということが比較的多いように思いますが、そこには音楽的なものをつけていくというものはあるからこそ、音を出しているものがある、きいてわかるというのではないかと思うのです。そうなるのと、音楽教育で一貫した教育ということ、音楽教育で一貫したという時、をいわれましたが、一貫したという時、どういう所で一貫したということか疑問を持つのですが。一貫した音楽教育なのか、一貫した生活、一貫した教育の中に音楽があるということなのかというところが問題になると思うのですがどうでしょうか。

加勢 一番効果的にとらえられるのがリズムだと思うのですが、身体的リズムとうたから出てくるリズムが別にあつていいと思うのです。コダーイを例にとれば、そういうものを整理した時、手をたたくことと歩くことで全部が発揮できるといわれています。うたで結びつけようという姿勢がこちらにあつた場合、それが身体的なりズムと音楽を結びつける手だてになるというとはいえるわけです。

堀合 幼児期に基礎といいますが、どこを基礎とかが大きな問題でしょう。お互いに基礎といってもみんなが考えている基礎が違っていたらおかしいと思うのです。うたをうたったり、楽器を

したり、お遊戯をしたりするのを一応音楽の分野としていっていましたが、幼児期に何をやってたらいいかという大きな問題は創造性ということですね。それを音楽をかりて子どもの持っている創造性を養っていかうということですね。子どもの生活の中にもともとあるものだと考えていいのではないかと思うのです。

津守 広く考えると、音楽というのは、子どもの生活の中にもともとあるものだと考えていいのではないかと思うのです。うたをうたったり、楽器を

もいわれています。たとえば絵の場合でも、先生には子どもみたいに立派な絵は決して描けないが、すばらしい絵を描かせることはできる。いろいろなことでそういうことができるでしょう。どんなにすばらしいことをいっても子どもにたっ

関 創造性だけでなく、精神的なものも技術的なものも最低のものは必ずもちあわせていたいです。

津守 何かいっしょうけんめいになっ

加勢 おとなの場合、創造性の方は遅すぎます。技術は進みますが。
本田 おとなの創造性というのは学生さんのことではないかと思うのですが、十八とか十九歳になってしまった学生さ

ぶりした時間を与えてやらなかったり、思いきり動けるような場所を与えてやらなかったりしたら、いいものは出てきません。先生はじょうずでなくても、基礎

い人の方が年をとっている人よりも上の場合がたくさんあるわけです。しかし年をとっている人はそれだけいっしょうけんめいになってやって、若い人にはどう

加勢 それはできますね。

依田 内容そのものを、知識をたくわ

ていれば、子どもの中から出てくるようなものを考えられるのではないですか。

堀合 私が高度といったのは、もちろん技術もですが、技術が高度というのはなくて、絵の場合ならば絵心とでもいうか絵に対する能力、理解力を先生が持っていることです。先生の創造性です。

がすべてにならないでもよいとも思うのがすべてになります。

創造性に入っていくような学び方をさせることを考えなければならぬと思います。音楽をとおしてこちらに学ぶ姿勢ができる人としてこちらに学ぶ姿勢が

うか絵に対する能力、理解力を先生が持っていることです。先生の創造性です。

自分を出す機会がないことが、おとなの場合あるわけです。その時に音楽から創造性をひきだすことができるでしょうか

他の心もそこで生み出していけると思う

響はできないというような意味です。

造性をひきだすことができるでしょうか

しようとする心をおして音楽に対する

心が生まれてくるかもしれません。幼児に對してはそれでいいわけです。幼児には音楽の話をしても、もとは結局創造性を養うことが一番です。

自分で音楽が好きじゃなくても、それそれ好きなもので養っていけばいいと思います。

加勢 音楽というのは日常性だけでは出てこないものでしょう。むしろほうっておくと絵とかお話になり、先生がひき出さないと音楽はできません。

堀合 うたはたしかにそうです。外国とちがいますね。

加勢 外国の場合、教会中心の風土があるため、音楽教育はいららないのです。だから音楽教育システムというのは後進

国にしかないのです。日本はそういう意味でハンガリーも後進国ですから、音楽の価値感を考え直さなければいけないと

思うのです。

今のところ小学生であろうと中学生、高校生であろうと、音楽の基礎がぬけているのです。基礎の評価ができるのはソルフエージの能力だといわれています。

一貫した音楽教育の柱はこれではかるとができます。基礎能力が端的にそこに出てくるわけです。音楽的文盲である

かないとかいう表現があるように、楽譜が正しくよめ、うたえるということです。基礎といわれる音程感、強弱感、速度感などが、幼児の段階でどこで布石

れるか具体的な要求があるわけです。基礎の布石ができれば幼児でも能率が上が

るといわれているわけです。だから専門家の立場からいえば、なんとかそこに布石をいれたいと思うのです。

津守 そこが今から研究の必要などころだと思うのです。音楽的文盲ということ

字を読めるようになる前に絵をみてわかるようになるとか、耳からきく話しか

ばとか、話しばいになる前の表情とかお互いの接触でわかりあうとかがあります。音楽もきつとそういうものがあるのではないかと思うのです。だから音楽の

楽譜がよめるという段階が、いくつものくつもあるだろうと思うし、そのへん

ところがどうも音楽の問題になるとたいへんわかっていないことがたくさんありますね。

本田 たしかに今ある音楽の布石を、こっちから持ってきて子どもに与える

ではなく、音楽の最初の段階というものをもっと考えなければいけないのではない

か、本当に根から生えてくるものなのか、かっていなかっただけではないかと思

ます。いろいろとよいお話をうかがいま

してありますがどうございました。
(記録・菊池)